



8
9
80
1
2
3
4
5
6
7
8
9
90
1
2
3
4
5
6
7
8
9
100
1
2
3
4
5
6

伊
門
卷
2766
03

おほよせ 古人のよりてきく 趣をあさひておなた
のえりあらへ あそくねり 實り 古人友とくと
心へ 全心集撰集折 隠逸傳などみなそきあり
往年を活子三熊鷹崇氏あまて閑田若文
筆拔かき 瞬人作あほ編をあはげて大引五
立にりくる佛家すもよきそれ丈なうむやと
玄一とひるひとくみその例すからひく佛家
奇行あるもの文明よりよみがへ八十餘人をあつめて
ほきゆ壁右の友とひす此人のを失ふぞ

すすくりりといへどもよく古人がお家體
からあつてゐの撰と及ふ尋常明眼の人より
心識あるかよようきと心よきへや古人が
よくうるすはんせんと雜う家へきかの色をも
季がるもの梅の花があるとみ子青と校正
上本して立身技ありすまん人おのめゆる
のつくから孝善れ志たよしむへり行人よしほ
神後とへると氷黒主人よりやがくらむ世に風雅
をとすかるものな見るよかくち所席を

うさ翁て勝敗のむかひきともおれの編集するを
まうんこれ三字まるうふ流俗があてそらかは
風流をほくえいをよねばよきありありとりへ
つき詩て景をよみ上件り人へれうへよきゆゑ
大の三字ア崎人をほくりといよへく於ほゆ

西子晉

まきは累俳士

不隨齋成美跋



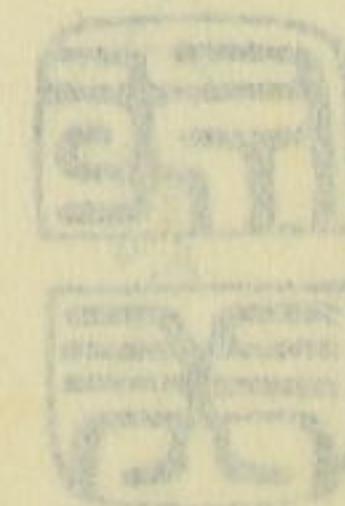
豊久臧

22

西子壇

さあらのむをめん

平賀義政



じめにかくは、是をもとめし者なり。其の事は、
國の事にあつて、是をもとめし者なり。其の事は、
おちだの御城事にあつて、是をもとめし者なり。
國の事にあつて、是をもとめし者なり。其の事は、
おちだの御城事にあつて、是をもとめし者なり。

玄玄居士墨傳

男 東京 遠

先人竹内玄玄一毛撮陽子の體が生處威臺にて死ぐ
國城失ふ附了同玉加古比古の兄弟の死後、遂に死ん
おふねて、勤らき、うす身を空乞也を入る。而
て、何を思ふとも甲斐あらんと、父、一城左あ思
ひを尚書小いぢりや、唯心に獨り心眼の眼あらんと、物
は、すみがれする所無處なしにて、ひよてアラゲみ
す。あり國の色と、輪も、一句に感激若くあり。國若くす
ゆ風か尋くと、彼附了至徳ノ千里と一步より起
るとりばん掛たゞんと、ほどま、傳変小跡らしきめや
直ちに、まつゆのく、一袖鷹やあれ、拵に感り、柳よ、草と
一句城山へ、あり往く小糾多の紙筆を費せり。お

瓢水童麿と玄遊にて遂成討論するあと他を一
部写さるべく後圓成往應するれ迄何り潛に亡る極の
間は極端も亦十许年去く其の江戸より東至深川
一居をトに嘗て其年序吾に據て御変を候する
茲ノ一年あり又存義賢所櫻門薦に従と教於下
集會す明和中官勾當小進み京橋の西源治術又移
居を有り新といひ又竹窓と號す「此魚も阿トハお空
湯まゝ」、「種小屋」も清早の河内や本拠田園北水の水
成けり秋萬風年月を春めんを寫付中の表や五味
三河より重病後表に達く「人ばうり死ぬとへおウ」、表
裏すと「孫の聲アラフ洋さん社かふとりるに躍出」て
はよく色小写ふ秋前子後のけよ縫ませ全縫よ並
小喰すかと是姑比照我恩での度どんねらく里方に向て、近
生生活より前子の生利みて女あわを食すきが子宮
捨す本妙に竟ち立憲被勤一申を冷ほ強る筋の足縫引
れ重せげりんすを駆ての産ありと或人の抱病よ漏
城留る者河童解く向く松田よ皆辭慶云にる辭ゆう置
盛狂僧狂ひ居んあとあれ智者まれども芋ぐら我みゆ
我抱病すナ底モ下手のつづき我歌我も嘗て
或時苦谷正正ぬ」、坐送れ度あど若とて申一坐く
禪枯の深ぬ本性禁ひあけ主ども我禁はりみぢ難ひて
乙事シぬ、一草むりみぢあど初一ほの云せしに従いろ
持人よ病を脚氣も厚よ能する所の音あひひは絶れ等又立松樹
あが主に学んで成程すがく僕主を承る處よ追く荷衣

我篠ざるを妻女家望をうて和漢の傳絕我篠一む是
守れふ所を顧ばずり始多東成く来てすり人の困窮我
赦ふすゆあきよばかよ身の浮浪も亦交糾る或ひ氣
老病全幅を備く更に人比資用小施ほまづら健てり
有餘を換して不足我補ふへ天の道まゝ可と應較ある
あく如也か一文化改元比年中枯叶五日我乃く極め
享年六十有三谷中長久院小篠庵

春日宿感 庭裏有梅先人常愛故詩意歎之懷洋散人
留連世上物華後迎老如斯歲月空庭際嘗聞言か迄
中徒見詠篠詩梅花似雪閑空地泣雪若梅感舊時無奈
宦前人去裏春風令彌憶支離

玄玄翁君與余有舊因贈脩舍宿草是暨

蘭縵 謄 蕭

勝 蕭

蘭縵

孝子其何似固熙恩室平敬恭棄降送汝唐風響聲遠
傳時俗慕徧歸世名固君追慕切此傷比蹉跎

題俳家寄禮

水戸

森庸軒

蘭縵

父遺此書子刻之風流道義異于茲詩歌不及俳諧妙技巻
直達花園師

たちま我失くゆる

竹内座乳

蘭縵

中くくふ今を逐つてあれ魂や所に堵ゆうじ比較く
我もも其父の追慕は座乳なりと 江戸 嘉穀技

云おな一云比禁叶や本をくなき人思ひ種をあ麻う
水戸 園田一琢

あき人の云比禁叶くも思ひとやア一面紅毛衣のね

菅谷正正

十年後ありみて一面うげを轟たるに因たりてゆく年移るも
わざわざおもむきにあがむかねへたまは思ふ
園田光令

弊あれがたえぬ跡を安らぎのほひをうちのぶ人のうじめ

安乘院玄玄居士



牽牛若や

又の

ねがひノケ

當菴室印

うつむいてつと麻の里あけは腐

玄玄男

音音

痴比弓に十葉阿おりの秋にて

玄玄妻

不英

短奇引ト照

お此世我玄里一たらちをの云おけるえども一紙五巻
六筆の筆波の威ぬるあ夕あよ考へはるこまつり一叶
いや波一色ゆだ一年月や竹のふーぐふ縫隙思ひ
は底十ああり三とせれ鳥すもあんぬければ医せおほ
れ一齋ふういあみをほんずれご懶惰するるを志にめで
素よりわね藏れる者よ等く褐色風窓石一匁成裏
おや桂林の一枝崑山は序玉子一そく芙蓉一のゆ向やつ
かきう幸あみごとく之にほさうんじ
あさごくや手筋の竹よほこうじも

青青

諸國名家追慕號句集拾錄 舟若不拘清序
篠原をい川うむけーて竈馬あく 江戸 完素
陰雨に中すよれくやのきれつゆ 同 送春
並あらぬ路あれどもまちまほ 同
初秋や村雲うげ地残はー海 同
さんあ月と昔アホムク相つ葉 同
雲散れしのびく秋の月日かゑ 家瑞
高を私と定め一人を慕うべき 宮
雲深の裡ういそひー龜うま 宜麦
せみれ壳よすぐまく皆や秋暮深 午心
水の月ふすぬ一とぬけふりわ 佐東
三の月の隈うるまおむ紫苑あく 宿
深きこと老ともいぢづまれば 仙痴
おりうげひいざねう手向うあ 青阿
夕暮や抱おもすすみ略あある 遊
咲くくはるやね紅のむくー今 成善
深尾をひや弘誓の私アヌミ
不法やが済むらけよ秋のつむ
翠れをの殺アヤモトモキムハ前
みのむーや今も豈アを喰多す
名葉化かー実生あふるアムヒ
松風う十三けの秋ゆくー

水入ればかくしきけり秋のうせ
人比才に翁のよ風あがえりあ
翁や利休がかねも飛鳥門
本源秋のねじりふり落小雨あ
翁筋すからひすきどなみ
がさ抜けば歸くあふり船比翁
睡れどぎれなみだまやゆのあと
君良やめこゆる種のたむけじは
翁や富士翁あはせれ石翁いろ
いあづすや翁よしけく波中申

我の月の櫻りん人萬秋のうれ
大ふおぬほりや枝比月のふりき
葉比翁やあづくねあをなぐさむ
れりうらみうちかねばん翁の同
何をうて今より是とぞ本様づれ
れさうかやあとも一日翁はし
れすゞくへむとくで文よび重ぐは
を麻やはひもあきりも枝比翁
兩戸まで差らす翁や葉比翁あ
きすきタゲれどこのつねり
けさすともアシヤモト月比翁
和ばふーの房主すむ叟を落こそ哉

蓑毛 穂雄 定稚 宣和 美和 宝淵 丘高 乌頂 来鷺 畦輪 竹育 舎池
馬頭 河内 屋張 游江 伊婆 三河 亂子 雅波
二世 乾透 紀逸 三世 境宣 多賄 佛妙 三世 佛妙
三世 佛妙 三世 佛妙 三世 佛妙 三世 佛妙 三世 佛妙 三世 佛妙 三世 佛妙 三世 佛妙 三世 佛妙 三世 佛妙 三世 佛妙 三世 佛妙

名舟や照もつゝまほすすゞ
 めるるる月れからば若ぬ屋一
 山里やすどせちよとよあむたの陰
 桜さむのりうるうありぬ居代声
 山は井の水汲みあく葉のはゑ
 窓も超えて摘う帰やけきの秋
 申くふんむむすねく船せらぎ
 いうかや遊ぐ帰ふあきの山
 家けめいでアトくれんぞう浦
 七夕も敷でむちうふ船ふ玉うあ
 まむやそそいさむき辭ぐつく
 あう船や船くいふをぐ風吹す
 米多くおくれひー船はう家
 美舟の船をもうするをううわ
 宏幸はすとをぬるのたらじうあ
 神社のまつ船やす一出港られ
 褙衣度よ船の車らせ船ひりく
 おまちあるもあうねど相をこな
 稚妻にかきくらと麻る簾舟うあ
 いあつあや獨りおちく旅材立高
 附てりふ諸事甚士の移添がろひ入とりくども空漁舟へもの
 併多あらひ秦胡道庭だりく匂哉亦る不役を引を
 ひて北ゆ京をあらう

蓬盧青青先生撰目

竹窓玄吉大人遺意

俳家奇人談

全三冊 出來

青青先生著

一續俳家奇人談 全三冊

同著

前編奇人傳の鷹鷹と描ひ遊代の高家夢を自筆風文曉龜友成
ありとぞを俳諧の諸君が一人もいりぬきのあくを解して書く
あくとぞを俳諧とあけ方人の風調と貌ひを傳中をほじむと後半編
の前編れども舊う十哲像筆を教も車月平沙の魂氣の國お筆勢がしも
あかばを優よ摸写。こそ外様の古画繪圖手づきのせられ、古人の
書画鑒定の見合つもなべくすぐて初編かいやき。無むのぞくはるよ
とうよ秀引かうくひらきをひきをひきをひきをひきをひきをひきをひきを

一椿年画譜 和人物之部 全一冊

二編 人物花鳥虫魚 全一冊

草木山水之部

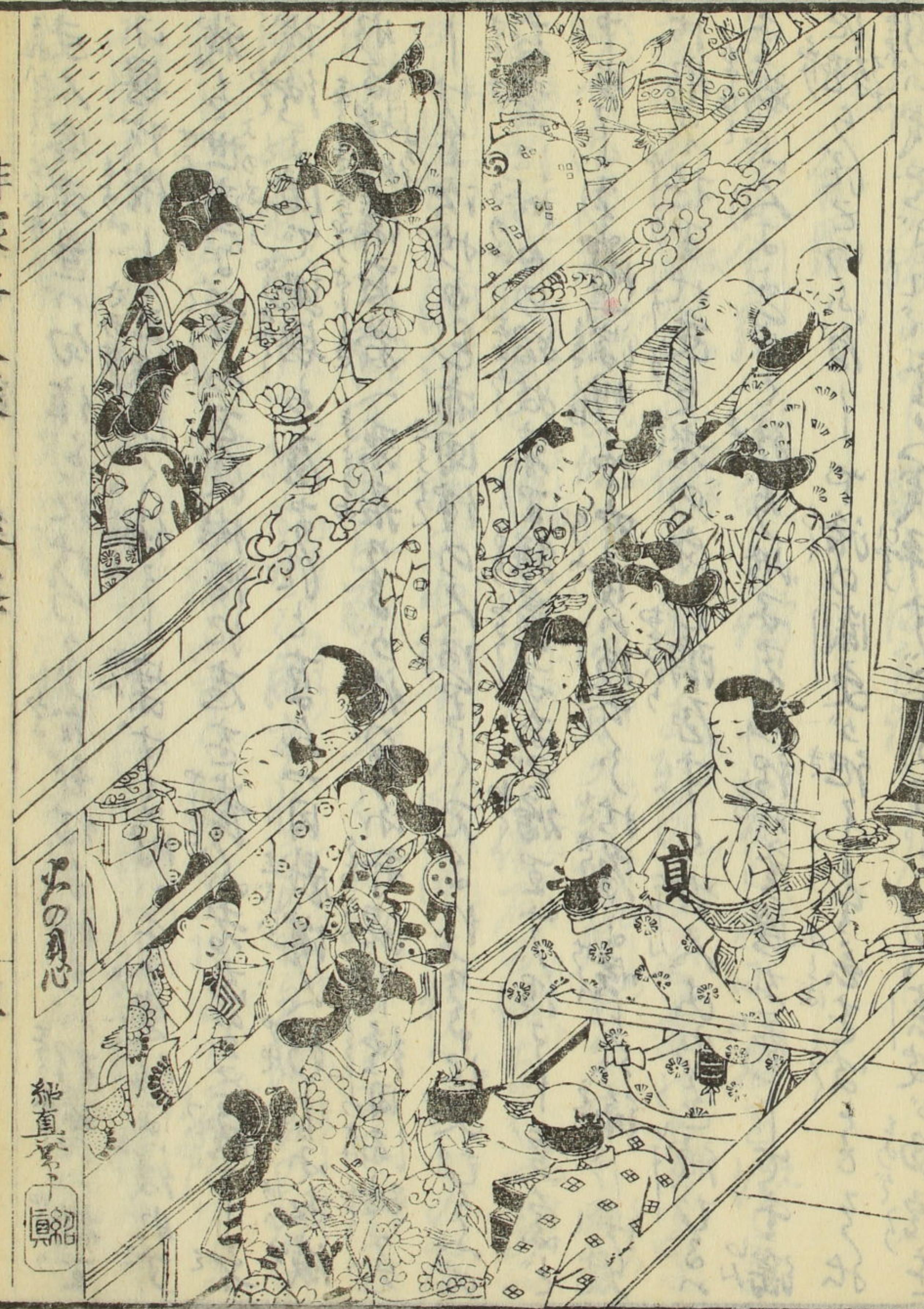
俳家奇人傳卷之下

中川乙生

支那名出ハ勢陽山田の社司セモ姓名を變ドテ中川柄
我あこ乙生と改ムシテ不陽極のん清一テ凡人ニ會スル
変我嫌ひ居を麥畠セ百小官一匂ら号一セ麦林舍
コリヒ此子蕉翁の末弟フニキニヌ双俊ハ支考涼翁等
後セ。始志に獨ト一荒壁に著ヒはドキヤ飾纏。蟹
也肩ふそんヘヤ衣クス。行秋を追フ。また江左繁
醉も鼻のかよきぬ室。吟。あとも濱北。ま砂。や。多。篠
津。不。一。多。字。一。る。ひ。よ。た。地。を。第。出。一。り。り。山。様。深。吟。吾。我
と淋い。窮。で。老。後。の。諸。作。を。不。拘。理。乞。金。正。風。の。ま。ま。き。

得とう至るほし或時東林倉又東園にて入る寄り主はく
我能薄茂学と紀志あひどもす或むつゝく覺ゆ下馬の
君ふを送ふ入庭きよ限河主やと答へ因く志主し深切
まればけぢみ六ヶ句をのつまうじ又厚ふ和歌句ハ何極空
度哉申一はすや答く唯眼前の楓葉を云ひよせし能
一夕作く安たるよりなり已より哉乃はす
わく多もまふて島へかゆふ零れいと宝しげよ船打うこ事
行を揚げて向まづ使ぢ御歌句の波すありともる燈籠船
かくげりきせりとお又附合せ轉變に及んで當時の人の左
生源者なーといふ寔小えとくのあ活河主一年涼衰を期
考うて支考乙巳余令茂催すを衣へを争ひてかほぐる老
僧の影を佛めみせて巫といふ妙句を咲くいりで此句は言
無ふうんやとお冷汗ようぐ一たるに新義の内一物い有と
独筆その句代序一これば一度すらあびくきをひかぬ院
一ねもて互せばどく城みてうつて板ひうみふとひふと向
かうり支考霞茂揚一ま僧の良戒にびよるく巫と傍
景を答む考父一一生れすと重句とあふんと我處もあれ
ハ妙句を惜むすまきといつていいと興じて深うきし或人更の古
流傳の百韻あるいく川何の去嫌いりやうと居取一に
我も左様だよとおど憲うれ変源く知んとまうば生る舊の
編におけるおども茂府一アキヒと申うる是すと初めれま
用を菊を移すが茂すつにせよとゆふ龜澄とおぐき云ふら
んう茲す又おど戯茂揚をゆむの癖りつん種くよ餘と
りくども文小咬へばくよ達て因く我の沙汰は口に能當ゆる

漸中



支人客老きば匂作もたせうとおがゆるめらばお前へお主
 小畠代催一三絃ひく傍ノ案する時ひを要仕は後れず
 我ち世塵よ苦心を度佛事に志を害ふ者あつて縛不^フ
 放繩るはで遊園を度すとまん一日戯場へけりふね儀
 やる婦妓隣女教一東居るるが後ハテ小寺瀧ド禮圓湯砌え
 一ヶ至汝おも亦因縁の人ほきく又やりてに又むふの
 女翁にゆるの婦妓草王録葉子あざ被至すがト裏事など
 やきりる時深叶やゆ日ハ阿ちトサ署ニ暖ヒシ浦ドケリ
 ちね不相至れど老の身を階庭すべく古人みやを誠むる
 全般^モが人よすきく挂り此子名姓の全愚を豊一て全濫
 に御らどりの庭一や清の園文^キが祀了キ云を安ヒシ松
 清い哉アザレバ主^ム人城洋すぐりとつん裏波^モが御室を
 海はりて強^スり強^スり載^スと腹を痛とすト一

舍羅

え縁の近金羅ハ治^{カミ}不^カ往^カ一て藝と種少^ハの名を^カくる
 老あり一蒲^カの穂^カや倒^カリ重^カたる影の妻^カ必^カ棄^カれ^トもろふと
 煙^カやぬ月^カ空^カ巻^カき^カ煙^カの^カ床^カと^カ幕^カグ^カ新端^カ遙^カを^カり^カく雨露^カ
 を^カ露^カぎ^カ立^カ孤^カ代^カ義^カく禪^カと^カ是^カ宴^カ一^カ檜^カ石^カの^カ儲^カ多く^カつま^カ
 すと^カ晒^カ巻^カを^カあむ金城^カの^カ枝^カの^カ風^カ流^カを^カ仰^カて笑^カとの^カ庵^カ
 成^カ付^カひ^カるに^カ事^カひ羅^カと^カ亦^カよ^カ軒^カと^カ同^カ比^カ着^カはま^カて^カ煙^カ
 従^カけぬ危^カ急^カ一^カて^カ接^カも^カ軒^カく成^カ事^カね^カど^カ事^カ金^カ飲^カ食^カの^カ没^カ
 ま一枝^カ付^カし^カ何^カぞ^カ後^カふさ^カぐ^カ物^カや^カ行^カると^カ窮屈^カする
 小羅^カあ^カと^カて^カ壁^カ立^カ比^カ敷^カあ^カけ^カ化^カ一^カ物^カす^カ傍^カや^カ
 ゆある紙^カ袋^カ一^カ束^カの阿^カト^カバ^カ禁^カて^カあ^カわ^カらせん^カ枝^カの^カ圓^カ

之を擇るに漸く朱武食ばかり色阿んとりふ羅因くを
朱玉てほ人の口福を害ひ乍りせすれが後姫くら御も
ははめらせドニ枝際あぐもを纏織量の草年年くるをが
感トありそや或年此より匂室へきに又よ
まづ化変不托冷して風玉兀りつむ居者却西よ夜盃
へきりてまりせらとざら付ひゆ多紀ひへだき而す有
住む仕合のまきあうてひけれども是どもか挿する
トや大すれ玉あくあめりト一ば、空と湯がま床あら
跡身とすまにてお砂やひまほに瞳絶材のばよ居らき
ひて、ぬすすれくま桶を差す何変ぢり

全麿原ちんぬ豆一

彦川材

彦川材ハ伊賀の人也ア尾の名、復原ます多り舊つ
の古老を主時人い川く金博小川枝河リ復城に齋川
主と称一たまこトヤ、首てなむ角おや、ろや、垣牛
移形や生く事くねるキ全ぐほ、行く一夢や櫓の
育る北陸、某列のほく、お同す種葉クあめ翁双一て後
私役をかかく、吳風経とある小瀧の支考はやを致一
送きる又何り名く彦川賣とりふ川浦と返答の出
作く多寫を解く是を名々食相撲と号

彦桂百里 附琴風

高聳る重い氣を鬻く業とまに匂出比文よ回く我始々
蕉つよ入ま一時ハ茅風とりへり後空す唐よちきごりく
三十六年又いぢく蕉つテ松風仙風何り仙風をよき

ちに十二峯の友あり後嵩叟を含哉ゑく竹一隱
而主と改む今日よりはで御宿一日と絶すニ新御の宿
すの一残くはらくまほ精工做極門戸後世寝ばス
岩船あり鶴鱈沾袖酒一て云く鶴鱈の向う小穴ゆるを
裏後革抜ての後と是よりて多比旅入アリ附子家
富く坐に御理を能すを作める物の肉高耳根す
るに拘らず一密我會一て馳至す底よ湯の廻人北室じ
而ア宣る時ハ経日経夜とりども至徳を象りらず
を奔候アテ風流有る又朝の如一享保十二年五月
六十二峯にて既に辞世^{モチ}35ぐれて深き因を忍みとし
玄子翁すすと稚波阿主を憇^{ミム}15あるあと後世人の
知る所あ

琴風と稚波の人何きのほありう江戸へ來く蕉翁のつよ
河を小舟泛して後青子に逢く掌ふとりひ如意架と号は
雲氣也眼玉庵とも柳クア宝食やいなけあ紀子少す程
ラシ一猶比翁翁もそぞほ衰ぢり一罗膳^{モタケ}よする白^{シロ}あ
玉あり一翁時琴風百里と並べ袖せうあ考く^{モカ}有^{モカ}不
敢^{ヤム}痛^{ヒツ}死^{シテ}辭世^{モト}一息^{ヒトヒキ}よ此味^{モカ}ひそ喜ばれ
音^{ヨウ}あ^{モカ}鷺坂の長刀^{ホノ}ふる手取^{モカ}手^{モカ}索^{モカ}人客總^{モカ}吳^{モカ}作^{モカ}有^{モカ}

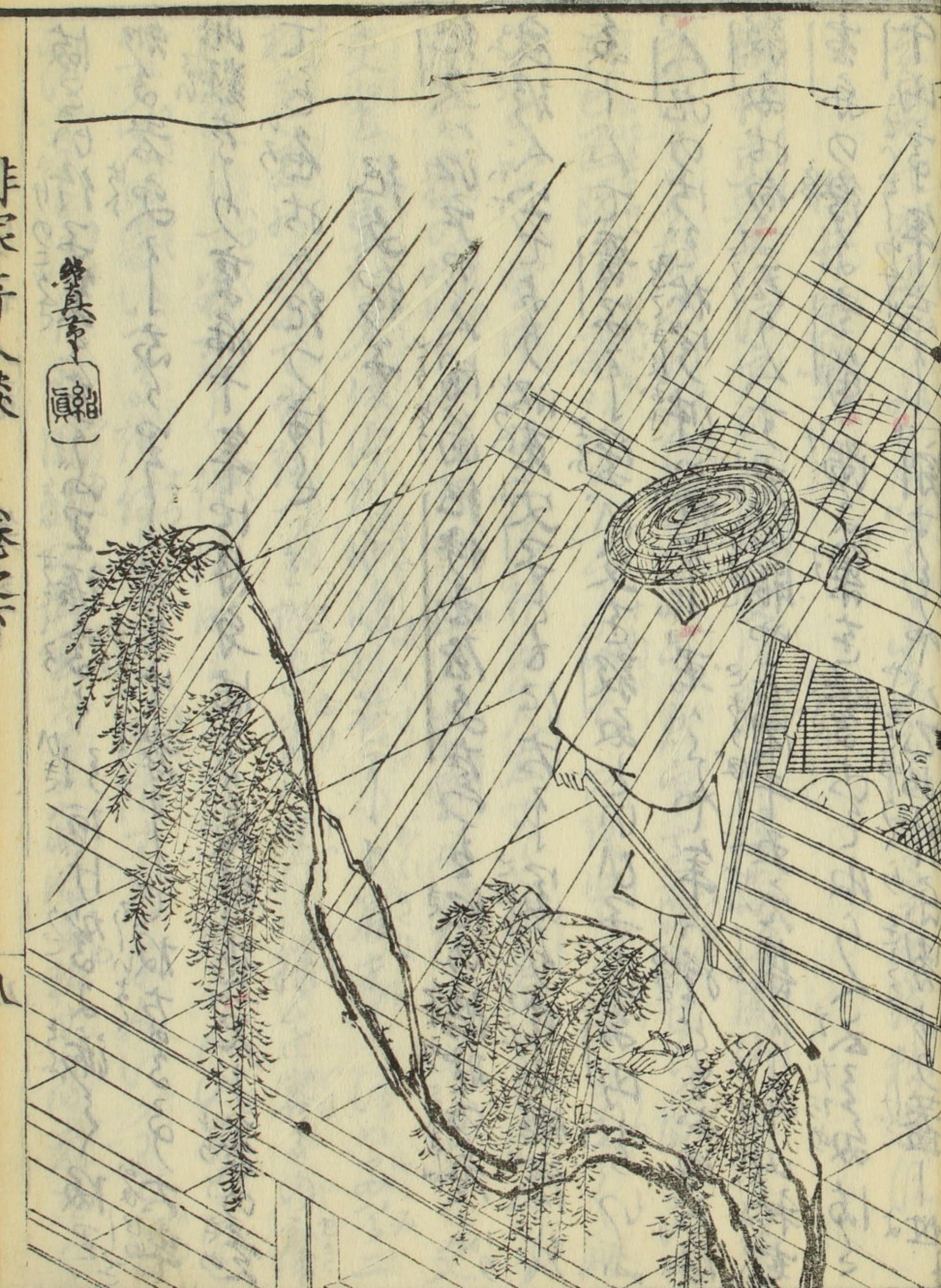
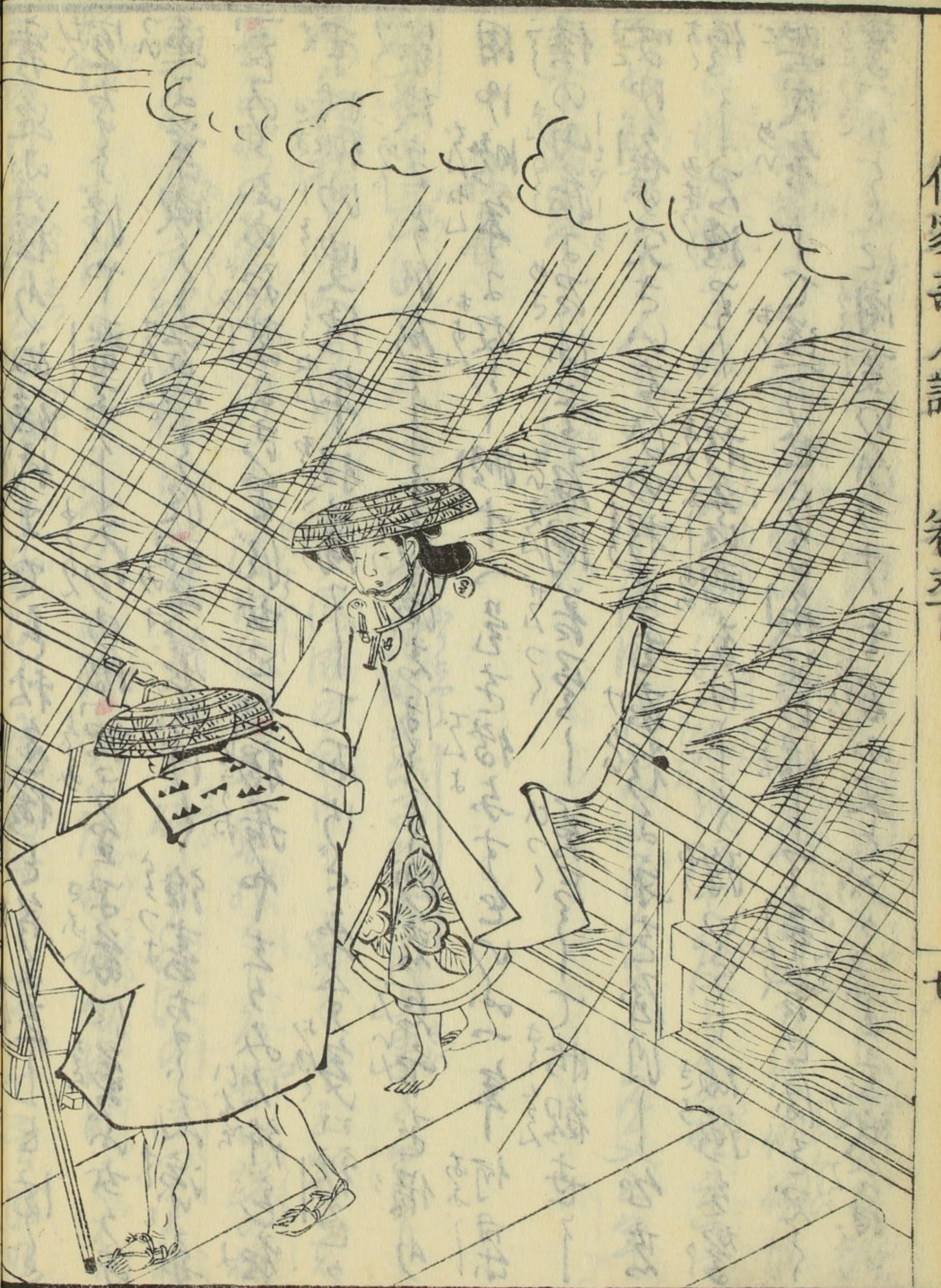
深川酒十

湖十には戸せん人晋^{モカ}予^{モカ}後^{モカ}業^{モカ}を文く初め深川^{モカ}酒^{モカ}て
より代く明残氏^{モカ}と^{モカ}幼^{モカ}なる財^{モカ}山^{モカ}のひ後^{モカ}老^{モカ}翁^{モカ}改
名^{モカ}又^{モカ}胤^{モカ}肝^{モカ}ともいひ^{モカ}一^{モカ}梅^{モカ}うやや^{モカ}生^{モカ}め井^{モカ}の櫻^{モカ}
志^{モカ}を^{モカ}しき雪^{モカ}の急^{モカ}草^{モカ}一^{モカ}梅^{モカ}う^{モカ}拔^{モカ}掛^{モカ}の母^{モカ}のき^{モカ}一^{モカ}萬^{モカ}株^{モカ}
音^{ヨウ}あ^{モカ}鷺坂の長刀^{ホノ}ふる手取^{モカ}手^{モカ}索^{モカ}人客總^{モカ}吳^{モカ}作^{モカ}有^{モカ}

落葉一て聲の舌はて餘音少く落衣を著し一語より
泥中被擣と金粉すす懐のあたふて平生絶り成極洞に
この性に欲をぬぐ云間の酒一盃残して度らずす確主ば
又おむかへんきの確く能はれどもすうす三年
六十鎰奉りて終り

秋色

愁名も武江志人は下り照陰町薦子山大同が妻もる
船ハ秋秋とりへりウサカナリ風流のせば一宿々十三年寒
寒上時の意不忘行く清ゆる鶴音裳はくら井の端の橋
を足で一井戸端の橋河ふす一湯内碎そおほの清つ至難
にやうすおほりるる本くみ附くるは奇極句我因く不
吉あ角名甲乙を渾一とひ一み附句おーまーて多ほ四
季更迭小川極りぬ後代までを秋色橋と名よき一もあと
室をすばらや晉子了入つの時一燈う金すみに並ぶ女う家
通よ葉國くそつとく翠簾はげく雅書すうん涼
てものふの禁ヌするまほせどり獨居やさうみ少許を被
事比物が雙絆年枝萬子一て而ちどをす多ひ秋色
寂れ立とくに立すま双後志ほくくげ志志市を假り
園ゆ勝年よねぐ湖十八景を傳ふすとひふ一年何處
候の山名よ尼院を庭園善焉一第是くて皆觀者了
ゆゆ色が文さいをひのれとて家移よ身を屋内一公居
修一石彌アラグわ豆に西をばーく隣りく隣地を望
奥戎官才て送らせらるる魚父の佐一と軒蓋せはをてく
聲畢どくに圓變りのつけをひく小父と入づる室を紙舎を



はさみけ竹子笠うちくぶ玉裾るく引け聲よ漏く風
御る者又すあらずこそども孝子てねぢるの太宰
此類すり享保十年に月夕はうぬ辞也元一漫の景
てを名めう紀つばく

絶文歌子

絶文江戸の人同苗絶停墨屋えちうを絶の鷦鷯の聲ふ
家旅人坐ており波東父子ともに方々、ゆきりすよ櫻鴻残
ゑーんと晋子了掌び父を教ぬといひ子を手山としゆ
入れのうじ松宇沖の帆了「東うや年ハ種どとおほろほ
教ぬせ向こうりくす老の眼や七用千五石集了千山秋毫
室ゆの傳よ毛角、陽よ巣を築むおもねらくふるぬふく
千山言年忘す」前すもやハひめ神乐男あり蓋一世
至衛比遊園のみを唱く生風流なるや絶称をば

接井吏登

接井吏登江戸の人嵐叟に詠くはあぶ周竹をその言
中へくるが故小川若枝あふを兵官を附与せらんじうり
ざも已既に老耄たましくて即ち之戒叟よ濃る周々一世
子を以く雪中ニセコに神免人左あく班衆ともりくり
嘗て衆の効よありて苟且に嵐雲といひ一ヶ社あく又
吏登に更じ老後深川ゆゆれ代巷下ト居す「ほひあす二
枝を君ぢみかて出代つ三枝を重ね寒に接き寄るの席
とまト一客あるく傍海附をおくれて跡る人の古口と
ひず先の客いづる城宿くのて風情すとあんいつも客
かいうちも清一を因縁の遇玄をも菊はよ和す旅者あく

寒の陽春白雪とや称すべし。猪の残骨よりの残不句
をよりて數年の添景を棄て去て、唯十八素茂残據ひある。
素王楠陰く向うよりふ事は方丈室たり。大竹やんをぬむ
が紀元六月、落す。紅葉のはのくとはあぐり。老の秋明
じを吹おもあらさ。又自像自讐。おく事や何ふまれとの
古菴子室。曆四年六月廿五夕残酒一卒する。

水間沾徳

水乃次第有い江戸せんもの磨ニシキ。財あり。猶済を好
んで云哉。汝と我共の風虎齋。近二公比。仰御す。列主。一
年。鹿島井種。まに和尙の支小より。奥の岩城博く左近君
時。齋公の歎悵を慰す。わらば。仰御の者。残據。ハセラ。往
み。あらん。く。安政。支ゆ。名公。翁。上達。のおき。不。ハ。ね。か。だ。
ぬ。何。す。と。祀。と。恩。業。の。お。う。ら。活。を。進。る。者。あり。伎。ち。古。
15。皇。く。尔。く。北。旨。宿。空。咬。せ。利。獲。き。一。効。く。多。残。友。被。と。被。
彼。12。タ。年。不。ど。死。而。か。れ。す。17。る。る。宿。夕。法。例。か。体。く。和。尙。は。往
左。き。変。ま。ご。帰。あ。く。宿。宿。せ。至。と。そ。極。あ。く。帰。宿。一。身。か。り。此
只。絶。渴。ぢ。み。を。被。消。す。度。一。と。多。生。れ。す。う。と。く。清。夢。才。才。
刻。秋。か。む。月。て。因。り。る。ハ。酒。う。す。ト。と。和。尙。か。と。自。ら。を。る。一。度。と。度。
所。除。す。ち。ん。ぬ。一。直。ち。小。齋。公。の。教。を。文。は。一。め。齋。翁。ふ。とい。い
後。泊。徳。と。改。む。日。く。夜。く。か。上。達。一。通。経。記。一。享。徳。の
法。を。い。い。を。以。く。き。不。喩。物。り。合。飲。茶。と。考。ほ。え。と。ヒ。核。人。を
不。る。孤。り。か。後。細。宿。包。ほ。根。人。も。雅。蒸。を。哈。く。又。ほ。し。く。一。石。姓。代。蒸。の。湯。
や。椎。宮。並。徳。拘。り。生。ご。魚。フ。て。細。蓑。の。笠。水。と。羽。と。食。ゆ。く。核。
タ。す。ど。み。け。人。能。出。と。今。一。度。考。イ。急。加。ふ。る。と。て。餘。朱。餘。毫。揮。毫。

即揮毫といひ文富彼西北市代より今朱雲あとを加ふる
予母人絶始てに享保十二年より筆三十字て歟

葉墨沾原 附行當

沾涼と伊賀葉墨の人に名を以て性とし初名序江かくもせ
東武へ來り一鼎うつふ入く南州といつゝ後齋沾云の教をえて
すり沾涼と改む至時廿句二十字よ涉ふ意や友鏡波との居残
程下落浦と南州移と号はる游と川や谷の鑑古を抄くむる
著北風歌素性をもとぞほに「唐六の一主と対の歌」
うゆ葉墨名残みせく福壽葉墨も多才すく和漢才出
ば後より連する而能得後綿百首實等浦と江戸砂子家良云
作國小松く然も六十首餘葉墨より實等文江戸あると聞あり
産種ぐの作四月く後より西山少佐内林一つほに延享四年
葉墨全と号す匂口至齡ひ石を批りいにまの今ねれ去

大淀三千風

大淀氏を伊夢也人一名経室友輔十又畢業と號を善く性
敏く才をもたらず身も弱く獨立するより三十一年の時移つ
てひく香室と名く延享中一日小猪吟三千句成べく匂稱
三千風といふ萬云空又無不取軒と号はる時いびり翁へまづはる
松翁と名ふ事よ已筆下るも一詩の事に才よ引説いて奥の細君
小留るふとすとよ手業めくらひ所の如きを語り又出くお前大娘
比沢道よ福王恒近母子主徳名利の心よりく三郎君を抱めり勤
進して玄孫不承傳度を建てくとく祐成、あ處女の小像を
あ並一時立派を嘗く右法事は遠近と見色を充年或に其
略立派むじこ名所の御事玉一つの料心すり役勘を呈

至一城邑知あぐらをちるに足をあらひの後贈するだ
季時に号へ候や右画行よむとぎは是より布衣が三人
此候けると素り同所に碑残達く東注居士と仰称
す行跡の空龕を曰けりにゆきにうちり此夕残歌を余聽こる
度一これ還云ちり重辞せ今夕どふアソウサギの夜に衰ぐ
立羽不角 附辰角

立羽不角ハ江か志人號シ至一より不角づふ入り松葉
小一て雅號せり空時北向け一地主本の端で左一葉の端
松月巣と号す虛雲秋菊南食ともいふを千瓣と称する
つ子千人よ阿彌ねるよ其名あうゆき得承小学ひ画獨
立一を匂ら承む和め亦萬一の金一財賞く冠里公の古鏡
に守峯一既了之因當考お傳す所とて右繪煮やあ色い

千羽畫督



何うるを詠れば喜とて奉まりる。壬午年秋、又公徳政の歿。了
補せられ事ふ。乃ち、方舟快斜す。後文より、寵遇化。又異
式時公。夏北夜やも居をふくよ。夙と戯れの方舟は應て
役の歎を立ぼか。一すりたこ。れはせきも是よ。連く。評判
よく。次第小繫写して。匂ら千金。名富哉。乃正徳の初矢童
御。より演術へ歸むする。時法方は僧徒を行附てとある。
六月の晦日。齋戒ははらひ。あらとあく。京橋道。一地。变成
ホム。祇居に移る。官家より江戸中の居宅成丈丈。移
笠。よ。宿屋。と。酒御。河至る。候。ち全く。向ふ。後ひ。あく。り
蓬。蓮。中。成。た。き。う。城。御。也。なく。數。境。一。て。数。年。著。速。若。矣
ぬ。す。く。成。失。い。ぬ。往。き。ど。も。有。破。漏。キ。よ。う。ん。あ。等。今。夜。に。が。る
世。人。え。添。申。よ。玄。櫻。こ。並。み。室。添。申。小。法。眼。一。罪。る。無。事。法
服。と。ば。う。全。安。一。た。る。の。世。人。ゆ。限。除。す。る。べ。一。始。め。ま。に。男。原
角。飯。倉。町。小。河。家。の。養。子。と。志。候。姑。比。奈。變。ほ。づ。く。と。て。そ
生。き。と。体。を。薄。く。延。王。古。ア。い。ぶ。ー。ノ。ー。て。洞。ア。又。け。む。い
ゆ。義。す。れ。ば。寂。安。た。改。妻。ク。余。経。ア。す。と。妻。家。く。廊。く。ハ
十
を。る。つ。ミ。率。ま。至。と。ど。晚。年。后。城。綏。治。萬。つ。か。よ。織。す。者。に
要。風。ー。て。一。流。を。す。は。是。代。化。も。と。称。す。皆。人の。和。而。ま。是
宝。曆。三。年。六。月。九。十。二。歳。の。壽。を。終。ふ。祥。世。立。塔。ハ。墓。あ。る
裸。ア。ソ。ニ。返。一。け。り。

大高子葉

太。高。子。葉。
太。高。子。葉。ハ。據。陽。赤。城。北。土。燃。市。城。治。傳。小。國。素。姫。日。小。庭。け。く
い。さ。茶。ハ。れ。う。山。横。一。初。角。月。に。戸。お。考。子。と。は。季。の。洋。多。角。高
亨。小。文。博。時。を。う。つ。一。る。人。ヒ。匂。城。集。モ。小。庭。ア。ヌ。教。古。品。や

匂徳合于時海士同而一て激讐の曉ゆばす人緒る也
全後を彼是沙世者宵車言ひ何義板に假云者又庶國の臣
也や車來は照言ふ所成は一垂りお傍へやひ極き松者中
而身の能難然と今時なまやの経ゆ度は沙事情被毛
生くせく小及ひすにゆむと一山代裂ちくももれて松丸
高松く高帆竹をも圓じほめてい滴泉を沙なの妙みくろ
沙君備名蒲室中丈にて全徑打捨並やく一句沙利華奉
致は 十二月十九日

子禁

浄徳先生

13年北去令詔崇みて追輶發向一草野は色程嘉祐七老之子
ウシ波徳^ノモリニ此幸子郎之洞ク奈其角枝^ノ故^ノ波徳^ノ名残の盡
北光ウシ波渺^ノモ骨^ノ名を重み在^ノ家^ノ玄窟^ノか古佐あと友人
心玄初^ノ立^ノ一^ノ日^ノ之極は文武奥深湯年向山是モ子禁^ノ也
葉^ノ枝^ノ骨^ノ一^ノ本^ノ又^ノ之匂作志^ノ取^ノ出^ノ來^ノ一^ノ事^ノて持^ノ傳
一^ノ事^ノ室^ノサ^ノ一^ノ本^ノ墨^ノ高^ノ蕭士何栗の記小アト^ノウ

加藤厚松

加藤厚松と沙物笠百七人武学^ノ併賀の產^ノ音^ノ子をゆうて風
韻^ノ猩猩庵と号す號^ノ文^ノ學^ノを以^ムくはせ又豈^ノ是^ノ和^ノ尚^ノ
後^ノ得^ノ忘^ノ我修^ノす初^ノめ若^ノう^ノは伊賀弘阿^ノ源津^ノ通^ノ高^ノ
よ^ム子^ノ往^ムせり虎^ノ糞^ノ居^ム士^ノと自^ム称^ムす老^ノ後^ノ急^ム人^ノ出^ムく^ノ家^ノ
と^ノ京^ノ宿^ノ子^ノは^ムつ^ノ人^ノ個^ノ房^ノの^ノき^ムり^ム頂^ノ一^ノ水^ノ阿^ノモ^ムり^ムと^ノ木^ノ室^ノ一^ノ寺^ノ
雷^ノや^ム立^ム比^ム金^ノと^ム聖^ノの^ノお^ムき^ム瀧^ノ落^ム可^ム曾^ムく妙^ムな^ムれ^ム僧^ノま^ム
骸^ノ骨^ノ寫^ム画^ム變^ム成^ム乞^ム奉^ム秋^ノより^ム秋^ノ耳^ノ御^ムて^ム漸^ムく^ムあれ^ム春^ノ
や^ム秋^ノ晝^ムの^ム内^ムつ^ム筆^ノを^ム拋^ムて^ム卒^ム死^ムの^ム人^ノ此^ノ句^ノを^ムゆ^ム

辞世と為さるといふ時より寧休二年たり

余えど個所と称す淫蕩ハ職の人居を原松はあらま性
の哉好く忘棄憤慨すは獨すとんに經倫す。淫くと
殆修く同アラホ。神宮や舞の形み何う也並宮
御士の属か何ドガ至けら。宋園子代也

松本達治

松本氏には戸萬人番五又後く召を以る初め謂坊主
時先生庵仙窟うる宿泊に以て古ふ時と安治色を覺て半岡
庵達治改名。御室のまゝに住。仙窟とお善一て詔
人比耳同成繫りせり。宣仲英通の才河内て坐極さ及び
また善後を以て極く金享保比名に才小農ふ江戸小てん籠
人單舟をつね。治達治もい奥洞焉天城漫ぐり。於
而後比句が重残弘うり。沢蟹。春蠶。春珠の多あり。玉葉也
されば國へば年一夜上北句を禮ひちて才奇を乞ふ。若
くにうけくいひ下の句。二月中句よしを輸じとりする
哉。ああて事と喜とめゆひどうをりる何事も言残すト
なる吟咏をす。時丁寧曆十一年亥月八十八歳うて歿
す。口業は向うう。先死する用を定。家中。翁妻や杖
で画。絵。筆土寫山と作。正。時月符。落成合。翁と
亦あま玉此は止めかふ生の句こそ。梅比翁あくとて因
梅のをものづ下。示一。テ。エ。キ。モ。拳。く。曉。る。者。す。一。室
小室。寝。至。席。とり。は。懶。在。行。り。此。手。物。あ。な。後。そ。の。裏。而
一。消。ト。に。梅。ニ。本。ト。の。句。我。碑。よ。歌。つ。け。う。是。を。ア。ク。族
て。梅。翁。の。句。解。一。た。主。と。あ。ん。云。あ。ろ。り。襟。立。波。問答する

はりて作齋生うきの名いと云ふ。財答くむゑせとす
れ役名づひを知るべし。すゑを軽すと稱すべし。

葉園友佐

葉墨氏を下矢了我といふ退佐にて平三宿をりくり晋子
セツノの名を平砂と改む。平砂後より佐あふ善み友佐中川
源菊之助と号す。出く三日人あがいう不獨の志。織田國
ふ僕に及ぶる枯木う京。神風やうちもと掌む稿せん。是
あきの躰も穂ある今日には人と成りぬ。良体義す。
て人多く詠み集原ふくづく子禁古事記。喜帆風流歌。向
砂高志。竹平朴修。与翁等と浦く。交ねり財答え。織田十二
年三月浅羽取附トトロ。河主く被殺業ち。才一友ヨシタマ。走ハタハタ。
高信を絶ハタハタ。すばりに友人に傳られ。海人シマヒト。覺王而く。桂
行せ小ふ寄竹手ハサウエ。お舍ひ縁く。久祀ねだぐ。主ミ。柳隱
ゆき。変すりやむ。に望らば。往來リラ。玉ひや。財答く
達く。ふ寔せす。何く。今ハ経交す。主と佐安て誠ニ思
ひ。支ハ善く。蒙ふ。あり我螺ホタル。主申車モチヤ。波ゆハシム。せん。あ
積す。往行す。時く。里名。殊そく。と立ち。あま。され。ゆ
活かす。で巡觀トトロ。主江放へ。飯玉東海主。年比。善友。通
玄帆アキハタ。近頃は。京放す。り。アキハタ。主よく。アキ
通。一。相州。百石。比。句。あ。主。と。く。、細。で。の。主。よ。ま。た。ば。ぬ
裏。又。子。愁。が。句。ま。ご。當。一。け。等。い。ぐ。何。ん。や。佐。い。門。主
おり。う。一。主。し。こ。答。く。主。あ。れ。ぬ。す。より。三。日。す。び。く。す。財
入。湯。に。す。り。主。す。ひ。ある。人。に。く。よ。財。和。浅。羽。あ。の。喬。臣。大
安。集。會。一。主。而。吉。良。家の。窮。へ。亡。君。の。難。云。す。り。と。忍。ひ

四馬五犧六龍七雞九雉

十六

番勝

懷絳勝



印中平陽

印中平陽

鳥

四

一魚

金鶴

五

魚二半

淮禽



金翁

六

魯

鳥



鑿

七

二

鳥



玄之子李淳甫字

一日長安花

松色



萬國之冠
二拜冕旒

珠

蜀江歸

五志



賈水丘

金綺

吳綾



龜首

王鳥羽



俊

龜青



田雪



山作

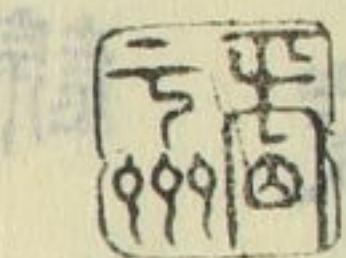
朱

大極



長豪

鷺演

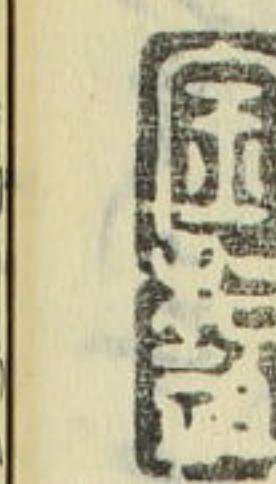
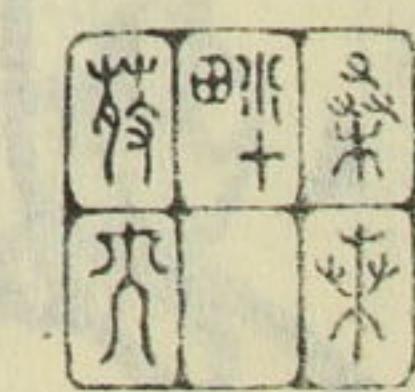


新月色

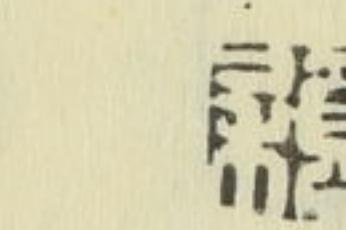
同文錦字詩



花影上欄干



生枝玉葉 兮兒贊



師玉器の音 明月照鳳

年有之度



入里主後多勢伐殺害ト此曉と小西門にて引説
云ばるを麻ふと母ハ先日春帳が後主一縷句の言すゆり
口人とも必ら度主中に洩放ドニ湯一毛へらず主形ゆリ
直下 予纏ヌ御主或湯舗に入り主君紀一様を被ふらう
すゆり今朝あす主小舍卒化すゆゑ名價ハ持來らず後日
お薦まく拂度ト主實トテ此羽織カニ垂あらうと
何某候ありお飲の物ぬひで卷一已も扇岳寺比つあ
いたり字麿はけやに氣喪風やか度ほ大字度や左度
左度まわらせト達せたあぐと呼トよりよ 寄家あり
蟻護れ武士のすと落主門戸残罕々入げ重りる後すと
まくてつかよおぐトゲモ深切や通トけんち申み知家
人何ありと方に感ドキ侵捨並ゆよ原ぬすの宵アラビ

風せり在傍の手を残せゆりぬ汝何累候のま縫くはう全駿
や廻すにとよればよ益ぬ前ある何用を主やとた肩に
答々今取立りくればよては綴附の根ねを纏むる縫
ゆゑぬ急ひそけやよ縫まわりて縫汗あうて居るを
駿いをりく恩へたもの等る寒ある戎神要一毛つるをす
又或財産をば匂をして何度もまた狂うてひふ十二文字裁
ほり絞れどもよみ文章を重ねて金みたりお言筋筋
車重に詮ドける小物いなく跡かの意の十二文字みて
至り字教合せんとせばニ便よ渡く悪う全あんこ是
従乞十二文字少て疎かに一句を定めらるや此人之後よつ
子の遠出小跡跡して疎かに名一と是ゆゑをすら享候十
九年九月六十五歳ノ年をちぬ句「中機よぬ」
暨至十三夜

活井舊室

活井同室には戸古人萬春の風姿慕ひ俳諧に鍛錬あり或
駿駿坊ともいひて身の丈太てんはんぐ之を懽る世
大物才と称せし所を性度みゆ我好せ一由碑思にて感
御歌の歌ふを考るが圓函たるふるひを邊場よりめ紀
のく沙と武合んす残せむ沙を客貌のあくはーき
哉感ドーむ内言才と立合ーむ割何の苦色もなく打する
られ官立ち立あへを投出ーと夕立にうぐれく絶る圓函
皆おまえ我女と石持倒ーある材すりそり絶持く第
クミ又その風流あるを羨むーとうや若くおせかすりゆる
皆武酒店より酒いどせよ云ゆれども豆鞆のいとあみ多

國ま主へりや 異どふね懃あり 家懇あぐすを お織出
遠のても 喰物のまー 鬼もか或年比三月に 田中紀や云
地一枚掛けのますく 孔子名號^{トモ} 壬午^{トモ} をされど 一の法
ノ故^{トモ} いく船遊の蟹^{トモ} 通比寒のうんと 変りふ 稲文^{ホヤ} うみ^{トモ}
氣象^{トモ} 古率^{トモ} 明教^{トモ} なり

梅酒

梅酒の件歩む人は どの無を 朝々業と ませり 宝珠瓶
萬代おぢて 神風籠^{トモ} 尾せし も古老守武を ましゆ
志^{トモ} 住^{トモ} そ附合^ハ 己^{トモ} 長^{トモ} する而あり 一年加別^ム 権
セ^{トモ} は 金沢^{トモ} ての まく^{トモ} 一^{トモ} 例^{トモ} 通^{トモ} 仲^{トモ} からむ
けく おれ^{トモ} 休み^{トモ} ほー^{トモ} て ある。又 利^{トモ} 家^{トモ} あれど 喜^{トモ} 熟^{トモ} して
居^{トモ} と つ^{トモ} ふ^{トモ} ま^{トモ} やあ捨^{トモ} の物^{トモ} を ま^{トモ} すれく 岐^{トモ} ふ^{トモ}
字^{トモ} おほ^{トモ} 寧^{トモ} は あ^{トモ} の 国^{トモ} と 称^{トモ} す^{トモ} と あり 量^{トモ} す^{トモ} 加
陽^{トモ} は 俗^{トモ} あ^{トモ} と 十^{トモ} の 葦^{トモ} と 湿^{トモ} て あるに^{トモ} 番^{トモ} つ^{トモ} か
無^{トモ} 事^{トモ} て あ^{トモ} 又^{トモ} 狗^{トモ} か^{トモ} 中^{トモ} ま^{トモ} う^{トモ} 懼^{トモ} され^{トモ} こと^{トモ}
候^{トモ} 一通^{トモ} ひ^{トモ} 清盛^{トモ} で いふ又^{トモ} 藤^{トモ} 抱^{トモ} 狂^{トモ} が^{トモ} 打^{トモ} 細^{トモ} て き^{トモ} と^{トモ}
山^{トモ} 茶^{トモ} 横^{トモ} 人^{トモ} は^{トモ} 体^{トモ} 滅^{トモ} いれて あ^{トモ} と 何^{トモ} も 流^{トモ} が^{トモ} 附^{トモ} あ^{トモ} 文
管^{トモ} ば^{トモ} う^{トモ} 跡^{トモ} ま^{トモ} う^{トモ} ど^{トモ} 句^{トモ} 技^{トモ} う^{トモ} 得^{トモ} て^{トモ} の^{トモ} 清^{トモ} 鮎^{トモ} す^{トモ} と^{トモ} 称^{トモ}
す^{トモ} 一

梅酒

子時^{トモ} おは^{トモ} 竹^{トモ} 兩^{トモ} とり^{トモ} ひ後^{トモ} 人^{トモ} と 改^{トモ} 江戸^{トモ} 人^{トモ} き^{トモ} 亂^{トモ}
後^{トモ} く^{トモ} は^{トモ} 中^{トモ} は^{トモ} 亂^{トモ} に^{トモ} 後^{トモ} 一^{トモ} て 邪^{トモ} 国^{トモ} 亂^{トモ} 三^{トモ} 号^{トモ} は^{トモ} 亂^{トモ}

もと通諱の本芽ク余乞薦て御薦贈花の付ニ聞を矣
ユ代國うて、密處や風よ吹きま、云比川聲諭も歎かぬく亦
何乞財んや、喚あぐ、河越に採の日朝つ、余時流條累眼中
み在り。甘宿後を、風や詠世が響樂の中、煙を移す。一役
づ淋は勢る附あク家、理方や壯色まつり、此の聲を譽
二面とも和平する種もの老、後ち民將へ取ク、其事主人さ
号一法名を宋河といひ、寛保二年六月死、追慕六千有六
緒世あ、一うちく有ともあらじ、因の裏。

唐内仙窟

唐内仙窟も武毅の人酒徒を以て、室永中京洛よりて
羅人と名を等る。近化箇女と号。又長生庵とよりふ。羽子
比同族不つちりと昭高表。酒巣獨よ私風じゆく酒窓、全
筆場巻の申合、嘆にあり西洋より大象車王ける附
今や引く氣士比禪跡の挂牛此向我。邦乃大德哉。壁
喻せり。称嘆をすした有ぼく、ばけん葉子を嗜む。左
器、花萼す。余比癖阿童又戲画を能す。すあらむ。右比
立園許ふもれちく減ざ。どりのを小巻中抽づ。右
奉あ。余時も多藝放毫ういて、以て幅の是を画。及第ひ
信宗宣事の在り。よゆりす文ひ。右重く種ある。右
人お及ばず。而なり。寛延元年至十月死。七十有四矣。

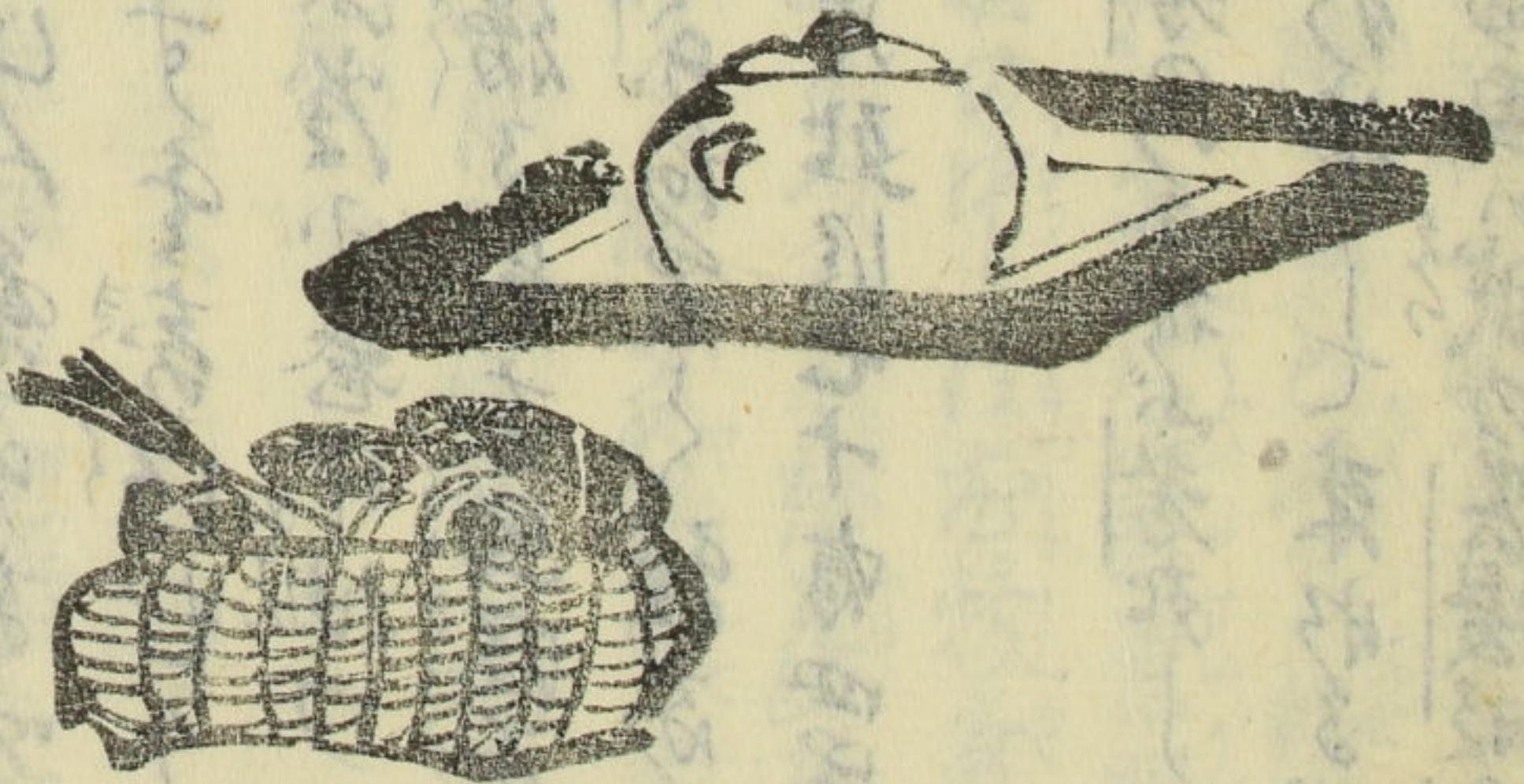
千代女

千代めを加刑松任の人也。少より支考のつむ枝ぶ考死して程
をゆを得ず。或時至瀧の盧え材引拂て東移る。お
そ比稿萬小説くおアーチ子と名す。画ハ鏡の吳後照よ後

中子

おま

手元



上手すり或時画城上小漢を下にと附あれと招部の禽
西をよく画くすやね良や地より雲あら絶阿がりて
主印妙さんぬ尼一始く來よアノムの附一添うまく取
ぞ林鳥初禦至我子代先ひる時一博塙約今日ハ何委まで
いづくゆきを情態也拂と思ふ一はド失事のこぼれ女才が
「文キアラモ端少」意うぬ身の舞す麻柳うあけ女の辞
乙室才一文キアラモ端又「豪豊奴女ハ狂ひよ紀柳うあ双才
同附一筆をあく 国一以本居よゑ一ける千代め多才
文代乃の句を考據よ我と同素あ生ども狂の一宇の諺
を本に及んでこ嘆体さりと儂追あるるほと歌の邊
後は尼となりふ通「佛吉城傳するより
かすうちあん三界唯一心の言残る方すまと蔓一筋ぢか

あり當時俳諧はうんすりとりども此傳壇より入るの妙處

山に羅人

山に羅人を世牙女と号は又山射山ともいふ若々主一聞の演
辯は從臣至後り感被^ノて更風を絶^キ延^シす嵐山そ^ノ藝
才やね比人の初櫻^ノ中^ノ洞をあほほ^ノ裏^ノ家^ノ門^ノ本^ノ
人^ノ比^ノ藝^ノの種^ノう^ノあ^ノ室^ノ居^ノ日^ノや^ノは^ノは^ノ隨^ノも^ノ喰^ノあ^ノえ^ノ
の法^ノお^ノ離^ノれ^ノ俳^ノ家^ノ成^ノ句^ノ唐^ノに^ノ舍^ノ一^ノ屋^ノ家^ノ多^ノ句^ノ我^ノ櫻^ノみ^ノ
後^ノ号^ノ代^ノ改^ノ老^ノ種^ノ窩^ノう^ノの^ノ極^ノオ^ノれ^ノ号^ノを^ノひ^ノつ^ノ人^ノ蘿^ノ
の^ノ河^ノふ^ノと^ノま^ノう^ノ此^ノ子^ノは^ノト^ノめ^ノ極^ノ圓^ノ意^ノ口^ノ宿^ノと^ノり^ノくる^ノ玄^ノ壁^ノアリ
素^ノす^ノ家^ノ氣^ノと^ノり^ノど^ノも^ノ古^ノ性^ノ財^ノ務^ノ小^ノ隣^ノく^ノ半^ノ年^ノ衰^ノ微^ノ
葉^ノ代^ノ廢^ノ一^ノ此^ノ通^ノの^ノよ^ノ世^ノ牙^ノ女^ノといひ^ノ羅^ノ人^ノといひ^ノ之^ノ寧^ノ下^ノ知^ノ
ぬ^ノ一^ノ宣^ノ歷^ノ二^ノ年^ノ五^ノ十^ノ四^ノ歲^ノト^ノて^ノ卒^ノる

桜井也宥

桜井源^ノちづ^ノ尾^ノ陽^ノ名^ノ古^ノ屋^ノの^ノ室^ノ居^ノま^ノう^ノ性^ノ淳^ノ朴^ノけ^ノ文^ノ種^ノ
を^ノ好^ノむ^ノ俳^ノ諧^ノよ^ノ長^ノド^ノて^ノ世^ノ不^ノ獨^ノ立^ノに^ノ豈^ノよ^ノ人^ノ少^ノ僧^ノく^ノ因^ノ
我^ノよ^ノ俳^ノ諧^ノけ^ノす^ノ又^ノつ^ノ人^ノも^ノな^ノ一^ノ唯^ノ正^ノ直^ノある^ノ小^ノ國^ノの^ノ古^ノ
近^ノ小^ノ云^ノい^ノど^ノせ^ノう^ノお^ノづ^ノつ^ノふ^ノ七^ノ八^ノか^ノち^ノみ^ノ一^ノこ^ノ俳^ノ諧^ノ
也^ノ宥^ノう^ノ松^ノ風^ノ皆^ノ何^ノ變^ノす^ノで^ノど^ノつ^ノ飾^リ一^ノ宝^ノ塔^ノの^ノ禮^ノ達^ノ引^ク
雄^ノの^ノ故^ノ、^ノ廢^ノ、^ノ良^ノや^ノも^ノら^ノは^ノ廢^ノ、^ノ石^ノ、^ノ食^ノ、^ノ禮^ノ慢^ノと^ノ傍^ノ、^ノ安^ノ
か^ノく^ノれ^ノう^ノ一^ノ年^ノ桜^ノ本^ノ達^ノう^ノ正^ノを^ノ字^ノ、^ノ室^ノ人^ノ紙^ノ慢^ノと^ノ傍^ノ、^ノ安^ノ
初^ノく^ノ金^ノ面^ノト^ノ一^ノ化^ノ物^ノの^ノ生^ノ死^ノ、^ノ死^ノ、^ノ枯^ノ木^ノ、^ノば^ノ死^ノ、^ノ滅^ノ、^ノあ^ノ
る^ノ大^ノ樹^ノ、^ノ數^ノあ^ノり^ノ又^ノ連^ノす^ノ所^ノの^ノ詩^ノ、^ノあ^ノら^ノ浦^ノ北^ノ梅^ノ、^ノ雅^ノ後^ノ
小^ノ波^ノ蘿^ノ等^ノの^ノ俳^ノ諧^ノ、^ノ之^ノの^ノ宴^ノ作^ノ、^ノて^ノ鼓^ノ舞^ノ、^ノ金^ノ車^ノ、^ノ赤^ノ轂^ノ、^ノ數^ノ
な^ノだ^ノす^ノ、^ノ先^ノ悟^ノ、^ノ改^ノ了^ノ之^ノを^ノ極^ノき^ノ今^ノま^ノこ^ノく^ノを^ノ世^ノ下^ノ桜^ノ

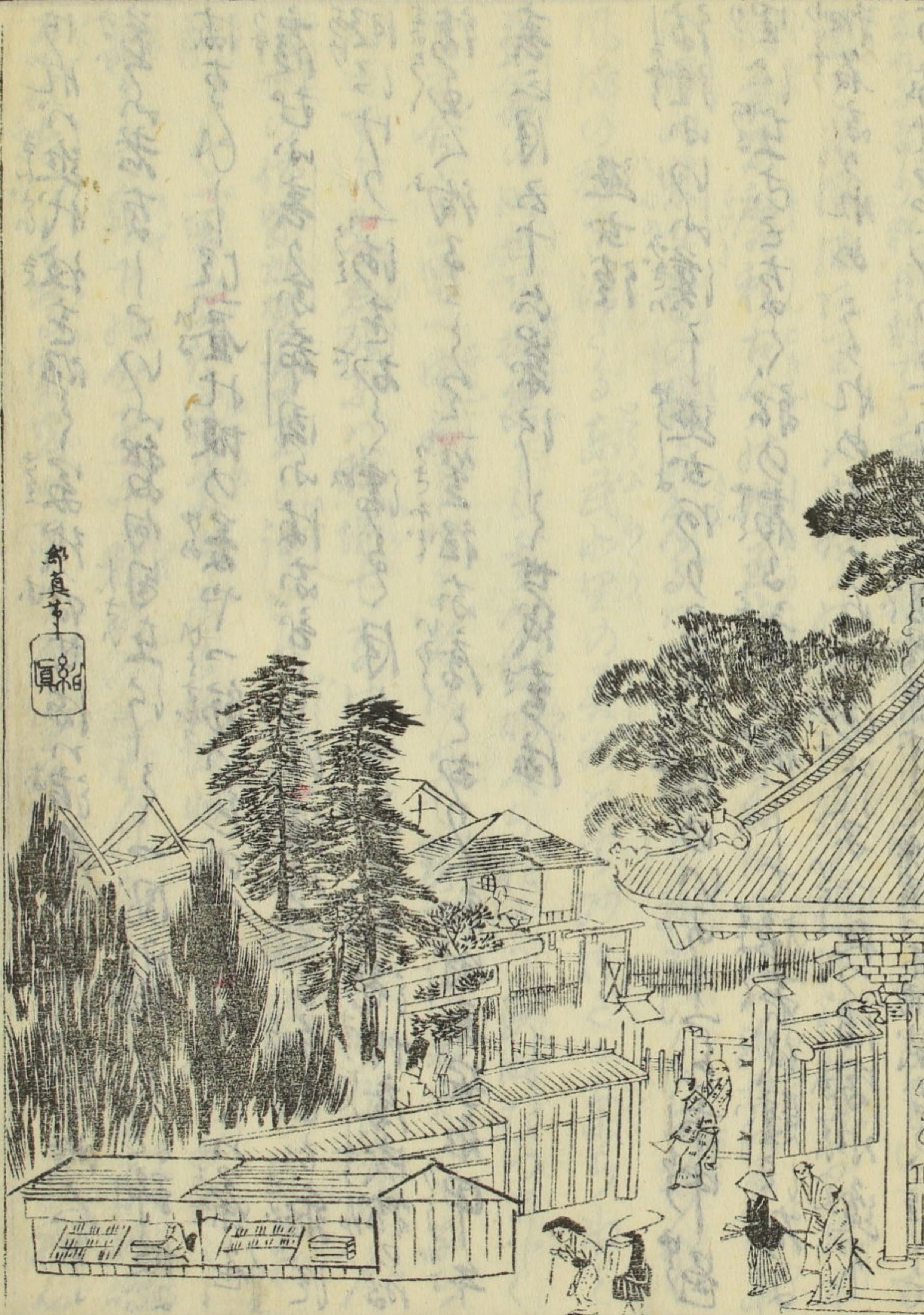
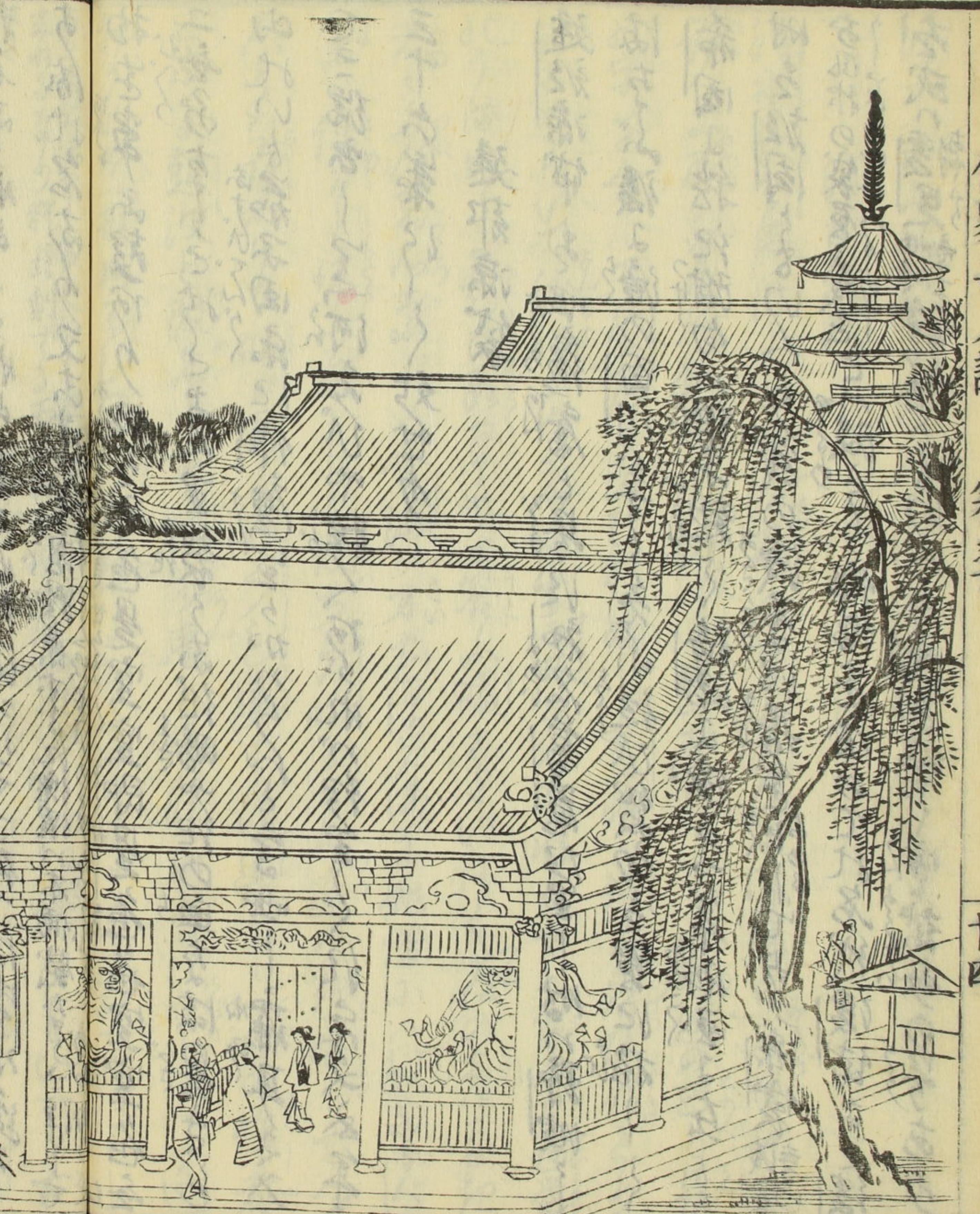
ひすゑを詠く多くの風流を知る

清水延波

清水長吉は丁の筆者あらまちとよ風流の延河にて
仰へよ已の業代歎ふ一夕俄アノ聲おろく家紋の己と長
此字を合トて長己と改むお姫一毛峰^{タモツ}に付ひ行^{ハシ}う
謡おころひてゆ何^{ナニ}ゆゑふを深^{ハシブ}うらあゆるやと空ふ已世業
比^ヒアホウ^{アホウ}、歌のぬ方^{アカマツ}と答ふ謡すといほく^{スル}の産をた
勢^{アサシ}と名高^{アラウ}ふと今^{アラハ}沙^サが才をはり高^{アラハ}よ能^{ハシム}小^{ハシム}と
余^{アマリ}徳^{アマリ}達^{アマリ}と役^{アマリ}引^{アマリ}候^{アマリ}と謡^{アマリ}ゆ紀螺^{アマリ}一^{アマリ}つ
人^{アマリ}かわふうり^{アマリ}候^{アマリ}る所^{アマリ}を遠^{アマリ}と遙^{アマリ}と遙^{アマリ}一^{アマリ}世の作者
である延波と改名^{アマリ}て獨步庵と号^{アマリ}す^{アマリ}に室^{アマリ}に室^{アマリ}はけま
神^{アマリ}が川^{アマリ}を曉^{アマリ}河^{アマリ}とびの行^{アマリ}と袖^{アマリ}ある家^{アマリ}減^{アマリ}ふ又改^{アマリ}隣^{アマリ}
物^{アマリ}を草^{アマリ}ふ聲^{アマリ}行^{アマリ}り^{アマリ}心^{アマリ}を即色^{アマリ}是^{アマリ}空^{アマリ}空^{アマリ}色^{アマリ}
ニ^{アマリ}あぢり^{アマリ}こぢ^{アマリ}と^{アマリ}人^{アマリ}至^{アマリ}裂^{アマリ}う^{アマリ}祀^{アマリ}暭^{アマリ}や^{アマリ}の血^{アマリ}を故^{アマリ}良^{アマリ}き^{アマリ}
山^{アマリ}れい^{アマリ}と^{アマリ}和^{アマリ}子^{アマリ}因^{アマリ}乐^{アマリ}に作^{アマリ}鷹^{アマリ}生^{アマリ}からうんと^{アマリ}呼^{アマリ}一^{アマリ}轟耳^{アマリ}入^{アマリ}
て^{アマリ}端^{アマリ}か^{アマリ}河^{アマリ}を^{アマリ}びや^{アマリ}曉^{アマリ}人^{アマリ}何^{アマリ}れが^{アマリ}想^{アマリ}ぐに^{アマリ}え^{アマリ}年^{アマリ}
三十六葉^{アマリ}く^{アマリ}死^{アマリ}せ^{アマリ}

延波涼袋

延波涼^{ヨウ}宵^{ヨウ}も吸^{キテ}薔^{ヨウ}薇^{ヨウ}と号^{シテ}初^{ヨウ}名^{ヨウ}葛^{ヨウ}巖^{ヨウ}な^{ヨウ}一^{ヨウ}時^{ヨウ}歸^{ヨウ}
は^{ヨウ}す^{ヨウ}後^{ヨウ}よ^{ヨウ}治^{ヨウ}の百^{ヨウ}川^{ヨウ}が^{ヨウ}す^{ヨウ}多^{ヨウ}小^{ヨウ}徑^{ヨウ}ひ^{ヨウ}駆^{ヨウ}向^{ヨウ}を^{ヨウ}營^{ヨウ}に^{ヨウ}旅^{ヨウ}一^{ヨウ}
希^{ヨウ}國^{ヨウ}よ^{ヨウ}旅^{ヨウ}附^{ヨウ}向^{ヨウ}の勢^{ヨウ}か^{ヨウ}赴^{ヨウ}く^{ヨウ}梅^{ヨウ}曉^{ヨウ}よ^{ヨウ}依^{ヨウ}る^{ヨウ}一^{ヨウ}年^{ヨウ}也^{ヨウ}是^{ヨウ}左^{ヨウ}
時^{ヨウ}も^{ヨウ}旅^{ヨウ}と^{ヨウ}より^{ヨウ}其^{ヨウ}の^{ヨウ}濟^{ヨウ}ま^{ヨウ}に^{ヨウ}居^{ヨウ}を^{ヨウ}か^{ヨウ}り^{ヨウ}て^{ヨウ}其^{ヨウ}涼^{ヨウ}袋^{ヨウ}清^{ヨウ}
あ^{ヨウ}風^{ヨウ}作^{ヨウ}の^{ヨウ}裝^{ヨウ}履^{ヨウ}を^{ヨウ}改^{ヨウ}うり^{ヨウ}能^{ヨウ}福^{ヨウ}を^{ヨウ}負^{ヨウ}めて^{ヨウ}其^{ヨウ}装^{ヨウ}清^{ヨウ}袋^{ヨウ}清^{ヨウ}
其^{ヨウ}名^{ヨウ}は^{ヨウ}か^{ヨウ}り^{ヨウ}よ^{ヨウ}改^{ヨウ}うり^{ヨウ}能^{ヨウ}福^{ヨウ}を^{ヨウ}負^{ヨウ}めて^{ヨウ}其^{ヨウ}装^{ヨウ}清^{ヨウ}袋^{ヨウ}清^{ヨウ}
其^{ヨウ}或^{ヨウ}の^{ヨウ}腰^{ヨウ}足^{ヨウ}其^{ヨウ}脚^{ヨウ}と^{ヨウ}より^{ヨウ}其^{ヨウ}画^{ヨウ}を^{ヨウ}妙^{ヨウ}美^{ヨウ}其^{ヨウ}秋^{ヨウ}の^{ヨウ}字^{ヨウ}あり



されば近代伎を以て氣哉おせゆの活會にて演じと世人今
蓋し者まゝぞりひ般向匂を行く一風か拂ひに降坡
はすひ一に登比坂の巻やつ筋いものつる村くわ篠山
産む小妻の系希國小浜あがーほ浦江も手多も縦に
横にけり一演をかく満ちて月夜や五月雨清竹庵成物の時
萬重く絶えども一笠袖あら高とあり初時承安永平年
嘉元月五十六歳行く世残す

遊女禮

阿彌ふりふ漢子遊女向りと我 舞のいづれを市中邑
里に在ふとなく船の有る事又僻一て極矣絶體に極よ
和名あぐれめうられめ氣されめ演士才子へ夜づ波濤水邊
かくは名あぐ又おまつ代傀儡素すなに傀儡の本偶戲をうそ演一て
車わざをり絶妙刺する破綻お身投の附録行洋クヨウ
昔三井風流万里一の右すれられ後撰の捨極後拾遺の宮本
圓翁の麗形古今比妙玉持の初君のひに近世江戸有象
北勝山家女等の歌よゑるへ始く盡く我をひくみ持んご
風流の袖を拂ふる東武ゆ里の裏あひをゆげどくあらぬと
意翁の附世寫櫻集つもすく匂代かへられうち感時むつすく
煙草の附世寫櫻集つもすく匂代かへられうち感時むつすく
後世の体察加賛すと詳せり固而未嘗害の來うけの事
詰く一男また寝覚えもあちの坂帳を固く潔く外人す
まつて卑下れをすを殺みの毛を引く一寢の氣氣を拂は
余れ然つも笑ひ實なる女あり卒坐毛代の役を附すを知ん

あはと笑つる人の笑くあらある方に假合へたまひど
 離波のためあめぐー連語ノ「我假を假川風せふ柳鍊あま
 假里み前川といひ一女のりわくかよひある風に假
 二夜のやうで晴あらに假る我打うみ一假水のへおと
 ありや居る湖東北極め何グー感財の吟一思ふおと積てを
 岩は居らぬ何もの西北娘姫を重りんあはとくる者との
 寂情を吟れ我をのぞき曲輪哉りどせ「ゆおなぐく落葉
 初音や誰が深をきこつ内被若向ノ一意・及瘦とくまよあら
 洞あらゆの経情のむかを假客よいと語へくぞおほく
 はゆ

俳家奇人譜卷之二

周清外史

日本馬杉繫先生著 清玉治水先生閱

全部廿二卷 合十三冊

近世所行文那略史類記事過簡實省怪異百出荒誕無
 稽讀者之厭之先生慨然ノ筆ヲ抽キ上高平王ヨリ下清今日至ル
 治亂興亡謀戰忠邪歎歎々詳記怪異削棄誤ノ亂シ姓氏因編
 予日本外史体制擬名周清外史去繁補之ノ先生請之粹ニ
 上世ニ播ス予讀史各位最寄ノ書肆於此書ヲ購求之賜其
 直筆精妙ニテ疎漏無

直筆精妙ニテ疎漏無

書肆

東京日暮橋區本石町貳丁目

江嶋喜兵衛

